



次の文章を読み、あとの問に答えよ。

(50点)

1

*三河の国足助村の百姓久右衛門といふ者、射術を好み、裏の蔵に*巻藁を置いて毎日これをもてあそぶ。ある日急なる用ありて、弓の弦も外さず、そのまま置きて出でたる跡へ、牛吉といふ召使ひの童来たり。(1)何心なく*よつ引いて巻藁を射たるに、裏口の窓より外面へそれたり(a)しかば、大いに驚き尋ね行くに、その矢はるかに遠き田の*畦に居たる鴈に中りて、Aを持ち帰る。主

5

人も帰り居て(2)呵責せんとせしが、大なる獲物あればさのみ叱らず、かの鴈を料理、近所の者を集め、飽くまで残りなきに至りて、空鍋を牛吉に渡す。しかるにその翌日より、かの射中てたる田の畦へ、雌鴈来て悲鳴す。牛吉その声を聞きて、悲しむことしきりなり。また夜々牛吉が夢に見えて、雄鴈の*苦趣を弔ひくれよと悲しむ。牛吉このことをば人にも語らず、病氣(b)なりとていとまを乞ひ、(3)たちまち髪を切りて道心者となり、的心と号す。浜辺を一庵に住居せしが、二十三年の月日を送り迎へて、初秋のころより里人に語りていはく、「われはこの九月*物故す(c)べし」と。その言葉のごとく九月二十三日、病なくして、昔鴈に逸れ矢の中りたる日に死に失せしは不思議の因縁なりけらし。

10

*持仏に辞世の句あり。

X 先立ちし鴈や浄土の道しるべ

(『煙霞綺談』)

注 *三河の国足助村||現在の愛知県豊田市足助町。 *巻藁||弓的に用いるために藁を束ねたもの。 *よつ引いて||弓を十分に引き絞つて。 *畦||あぜ道。 *苦趣を弔ひくれよ|| (供養をして)あの世での苦しみをなくしてほしい。 *物故||人が死ぬこと。 *持仏||守り本尊として身近に置いておく仏像。

問一 傍線(a)~(c)の助動詞の文法的意味として最適なものをそれぞれ次の中から選び、記号を記せ(同一記号の反復使用不可)。(6点)

(ア)推量 (イ)命令 (ウ)受け身 (エ)尊敬 (オ)可能

(カ)自発 (キ)過去 (ク)完了 (ケ)断定 (コ)伝聞

問二

- 傍線(1)の語句の意味として最適なものを次の中から選び、記号を記せ。
- (ア)夢中になって (イ)これという考えもなく (ウ)精神を集中して
 (エ)人の目はほかからず (オ)がまんができません

(6点)

問三

- 文中の空欄Aに入る言葉として最適なものを次の中から選び、記号を記せ。
- (ア)あとのまつり (イ)漁夫の利 (ウ)九死に一生
 (エ)けがの功名 (オ)一炊の夢

(6点)

問四

傍線(2)とあるが、なぜ主人は「呵責」しようとしたのか。二十字以内で説明せよ。

(10点)

問五

傍線(3)は「そのまま髪を切って出家して」と口語訳できる。なぜ牛吉は出家したのか、六十字以内で説明せよ。

(14点)

問六

Xの句に込められた牛吉の気持ちの説明として最適なものを次の中から選び、記号を記せ。

(8点)

- (ア)誤って殺した鴈を食べたことへの後悔が出家のきっかけなのだから、鴈が自分を極楽浄土へ導いてくれたようなものだ。
 (イ)自分が知らないうちに極楽浄土へ送ってやった鴈が恩返しをするために、極楽浄土から導いてくれたようなものだ。
 (ウ)つがいの雌よりも一足早く極楽浄土へ送ってやった雄の鴈が、雌と自分を極楽浄土へ導いてくれたようなものだ。
 (エ)雄を殺された雌の鴈が悲しみのあまり自分に恨みを抱いたことが、自分を極楽浄土へ導いてくれたようなものだ。
 (オ)誤って殺してしまった鴈がきっかけとなって出家したのだから、鴈が自分を極楽浄土へ導いてくれたようなものだ。



解答

問一 (a)キ (b)ケ (c)ア

問二 (イ)

問三 (エ)

問四 牛吉が主人の留守に勝手に弓を引いたから。 (20字)

問五 戯れて雄鷹を殺してしまったことを後悔し、雌鷹が夢で言う通り、雄鷹を供養してあの世での苦しみから救ってやろうと思ったから。 (60字)

問六 (オ)

速解！本問のツボ

①文章の内容を正しく理解できていたかをチェックしよう

【今回の文章の概要】

〈あらすじ〉

○久右衛門は弓術を好み、裏の蔵に練習場を設けて、毎日弓を引く練習をしていた。

○ある日、久右衛門は急用があつて、弓の弦を外さず、そのまま置いて外出した。

○召使いの少年の牛吉が、好奇心から主人の弓を手にとって、的を射てみた。

○矢は的を逸れて裏口から外に飛び出していき、遠くの田のあぜ道にいた鷹に命中した。

○慌てて矢のあとを追いかけていった牛吉は、この結果を見て、死んだ鷹を獲物として主人のところに持って帰った。

○帰っていた主人は、牛吉を叱らうと考えていたが、牛吉が持つて帰った獲物が大物であったため、そうは叱らず、鷹を鍋にして、皆で食べてしまった。

○その翌日から、牛吉が鷹を射当てた田のあぜ道に、雌の鷹が来て悲しそうに鳴くので、牛吉は悲しく思った。また、毎晩この雌鷹が牛吉の夢の中に出てきて、雄の鷹の供養をしてやってほしいと言つて悲しむ。

○牛吉はこのことを誰にも話さず、病気を理由に久右衛門に暇をもらつて、出家して的心と名乗った。

○二十三年後の初秋、的心(牛吉)は、里人に「私はこの九月に死ぬだろう」と言い、その言葉通り、九月二十三日に、病気でもないのに亡くなった。それは、昔牛吉が鷹を射殺した日であつ

た。

←

○辞世の句——先立ちし鴈や浄土の道しるべ

②重要な設問のポイントをチェックしよう

問三 牛吉の放った矢は、「巻藁」をねらったものの、「外面へそれ」、その結果として「鴈」に当たった、という流れに最も適切な慣用句を選ばばよい。

問四 主人は牛吉が「大なる獲物」を持って帰ってきたことにより、「さのみ（＝それほど）叱ら」なかつたのだから、牛吉が主人に「呵責」されるようなこととしては「主人の矢を使ったこと」であろう。あとは、牛吉が使った状況について肉付けしていけばよい。

問五 本文五行目の「しかるに」から傍線(3)までの文脈をたどると、牛吉が出家を思い立った理由として「雌鴈の悲鳴を聞き、雄鴈を殺してしまったことを反省していること」と「雌鴈が牛吉の夢に出てきて、供養するよう頼んできたこと」の二つのエピソードが取り上げられている。あとはその二つを字数にあわせて簡潔にまとめていけばよい。

問六 和歌や俳句の内容に関する問題の場合、その句を詠むにいたる文脈をしっかりと押さえること。この場合、牛吉が出家したいきさつと牛吉が亡くなった日の状況を踏まえつつ、Xの句の意味を考えていけばよい。

今覚える！重要古文単語

□ あそぶ ①好きなことをして過ごす。②気ままに歩き回る。
③詩歌、管弦などを楽しむ。

↓③の意味で用いられることが多い

□ 飽く ①満足する。②飽きる。③十分に……する。

↓「飽かず」の形で「①満足しない。②心残りだ」の意になる

□ いとま ①余裕。②休暇。③辞職。④別れ。

出典

西村白鳥 『煙霞綺談』

西村白鳥は、遠江の国（現在の静岡県西部）に生まれた儒学者。俳人でもある。天明三（一七八三）年没。

『煙霞綺談』は、三河の国（現在の愛知県東部）や遠江の国で、民間に伝わる話を中心にまとめたもの。収められている話の中には、巨人に出会った人の話や、幽霊の子を産む話など、とても事実とは思えない奇妙な話が含まれる。

解説

問一 助動詞の基本的な意味を問う問題。

(a) 「しか」は、過去の助動詞「き」の已然形である。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
(せ)	○	き	し	しか	○

と活用する。

(b) の「なり」は、直前に「病氣」という体言があるので、体言

や活用語の連体形に接続する「**断定**」の助動詞「**なり**」だと判断することができる。同じく「**なり**」という形で、伝聞・推定を表す助動詞があるが、伝聞・推定の助動詞「**なり**」は、終止形に接続することから区別ができる。

ただし、伝聞・推定の「**なり**」の直前にあるのが「ラ変型活用語」の場合は、伝聞・推定の「**なり**」も連体形に接続するので注意しよう。

(c) 「**べし**」は「**推量**」「**意志**」「**可能**」「**当然**」「**命令**」「**適当**」「**勧誘**」などの多くの意味を持つ助動詞である。よって「**べし**」の意味については、文脈の中で最適な訳をその都度考えていくようにするのがよい。

この場合はどうだろう。「**べし**」の文法的な意味としてあてはまるものは、(ア)「**推量**」、(イ)「**命令**」、(ウ)「**可能**」の三つだ。その中で最も適切なものはどれか、文脈を考えれば絞り込める。もし(イ)だとすると、**的**心(牛吉)が「**私はこの九月に死になさい**」と命令したことになるが、自分に対して命令するというのは文章として不自然である。(ウ)の「**可能**」も文脈を考えるとおかしい。

結局、これは(ア)「**(強い確信を持った)推量**」の意で、「**私はこの九月にきつと死ぬだろう**」と、**自分の死を予知している**とするのが最も自然だということになる。

問二

語句の意味を答えさせる問題。主人久右衛門が弦を張ったままにしていた弓を、牛吉は「**何心なく**」引いて矢を射た。「**心**」にはさまざまな意味があるが、この場合は「**思慮**」とか「**判断**」

という意味になる。心の働きの一つだと考えればよい。「**何心なく**」は「**何という思慮や判断もなしに**」という意味の慣用表現。牛吉は、**特に深く考えもせず**、ただ好奇心に駆られて弓を引いたのだろう。それが大きく的を逸れて裏口の窓から外へ飛び出したのだ。正解は(イ)。

問三

慣用句の空所補充問題。的をねらって放った牛吉の矢は、遠くの田のあぜ道にいた鴈に偶然命中していた。矢を探しに行つてそれを見つけた牛吉は、この獲物を持ち帰ることになる。**本来なら大きな失敗だったのだけれど、それが結果として大きな獲物をもたらした**のだ。そのような話の流れと、それぞれの慣用句の意味を考えれば、どの選択肢が適切かは判断できる。

(ア)「**あとのまつり**」は、「**時期を逃して何の役にも立たないこと**」。
 (イ)「**漁夫の利**」は、「**二者が争っている隙に第三者が利益を横取りすること**」を言う。

(ウ)「**九死に一生**」は、「**九死に一生を得る**」と使い、「**危険な状態からやつと助かること**」を言う。

(エ)「**けがの功名**」は、「**誤ってしたことが思いがけなくよい結果をもたらすこと**」。

(オ)「**一炊の夢**」は、「**人の世の栄枯盛衰のはかないこと**」。「**一炊**」は一度飯を炊く間ということだ。盧生という青年が、宿で飯が炊けるのを待つ間にうたたねをした夢に、一生の栄枯盛衰を味わったが、目覚めるとまだその飯が炊けてもいなかった、という中国の故事に基づく故事成語。

以上の慣用句はどれも基本的なものばかりだ。ぜひ覚えておこう。正解は(エ)。

問四

記述式による理由の説明問題。問二で見たように、牛吉は主人が留守にしている間に、好奇心からその弓をこつそり射たのである。言ってみれば、主人のいないのをいいことに、**主人の持ち物を無断で使った**のだ。これは使用人としては決してやってはいけないことだ。よつて本当ならば、主人が牛吉を叱るのも当然のことである。

ところが、実際には主人はそれほど叱らなかつた。それは牛吉が思いがけず「鴈」という大きな獲物を持つて帰つたからである。主人はこのあと鴈を鍋にして、近所の皆でおいしくいたでいてしまう。牛吉の獲物を皆でおいしく食べる手前、怒るにしてもあまり強くは怒れなくなつたというところだろうか。

問五

記述式による理由の説明問題。ここまでの流れを押さえておこう。

牛吉の「けがの功名」の獲物を皆でおいしく食べて、めでたしめでたしで終わりになるかと思うと、そうはならない。「しかるに……」(05)以降の文脈を確認してみると、翌日から、どうもその鴈と夫婦だったららしい雌の鴈が、夫が射られた田のあぜ道に毎日やってきて悲しげに鳴く。牛吉はその声を聞いてしきりに悲しんだ。おまけに、その雌の鴈は毎晩牛吉の夢に出てきて、雄の鴈の供養をしてほしいと訴え、悲しみの声を上げる。その結果、

牛吉は誰にも事情を言わずに、病気を理由に主人に暇乞いをして、そのまま出家してしまつた。

以上のように問題文の流れをたどるなら、**牛吉は、田のあぜ道で雌鴈が鳴くのを聞いて悲しみ、自分が雄鴈を殺してしまつたことを後悔したと**考えられる。さらに、**夢に現れた雌鴈の、雄鴈の供養をしてほしいという願いを聞き入れて出家した、**ということになる。解答では、この二点への言及を入れることが必要になる。ちなみに、「**的心**」の「**的**」は〈まと〉、「**心**」は〈まん中〉の意。牛吉が、雄鴈という的に矢を命中させてその命を奪つてしまつたことを、忘れないようにとつけた号なのだろう。

問六

的心(牛吉)の辞世の句の解釈を問う選択式問題である。出家して的心と名乗つた牛吉は、浜辺に庵いほを結んだ。庵は〈粗末な仮小屋〉のこと。そこで暮らすこと実に二十三年、その初秋はつあきの頃に、「自分はこの九月に死ぬだろう」と里人に告げる。旧暦で、秋は七月・八月・九月の三か月。初秋は七月のことと考えられる。すると、ざつと二か月前に、自分の死を予言したことになる。そして、その予言通り、病気にかかつたわけでもないのに、彼は九月二十三日に亡くなつた。極楽往生を遂げたわけだ。その日はまさに、昔彼が逸れ矢で鴈を射当ててしまつた日だつた。彼は持仏に辞世の句を記していた。

——先立ちし鴈や浄土の道しるべ

「先立ちし鴈」とは、自分が矢で射抜いて死なせてしまつた「雄鴈」のこと。「先立つ」は〈先に死ぬこと〉を言う。「浄土の道し

るべ」は、〈浄土（＝仏の清浄な世界）への道しるべ（＝ある場所までの道を示してくれるもの）〉ということだ。どうして「鴈が〈浄土への道しるべ〉なのだろうか。

この話で、**牛吉は偶然殺してしまった雄鴈の存在をきつかけに出家し、仏道修行の道に入った。**つまり、**雄鴈は牛吉を浄土に至る道に導き入れる存在であったとも言える。**だから鴈が〈浄土への道しるべ〉なのだ。正解は(㉠)。

(㉡)は、「鴈を食べたことへの後悔が出家のきつかけなのだ」とする点が不適切。牛吉の出家のきつかけは、**問五**で見た通りである。

(㉢)は、「極楽浄土へ送ってやった鴈が恩返しをする」が不適切。恩返しという要素は文中に出てこない。

(㉣)は、「雄の鴈が、雌と自分を極楽浄土へ導いてくれた」が不適切。雌の鴈がどうなったかは文中に触れられていない。

(㉤)は、「雌の鴈が悲しみのあまり自分に恨みを抱いた」が不適切。夢で雄の供養をしてくれと頼んではいるが、恨みを抱いているとする記述はない。また、句の中に「先立ちし鴈」とあるのをおさええていない点からも誤りと判断できる。

全訳

三河の国足助村の農民である久右衛門という者は、弓術を好み、家の裏の蔵に巻藁を置いて毎日これを的にして弓を射ている。ある日急用があつて、弓の弦も外さず、そのままに置いて出かけたあとに、牛吉という召使いの少年がやつて来た。これという（深い）考えもなく弓を十分に引き絞つて巻藁を狙つて射たと

ころ、（矢が逸れて）裏口の窓から外へ飛び出したので、大変驚いて（矢の落ちた先を）探しに行ったところ、その矢は遙か遠くの田のあぜ道にいた鴈に当たつて（いたので）、（牛吉は、矢が逸れてかえつて）けがの功名となつたその鴈を持つて帰る。主人（久右衛門）も帰つて（弓を勝手に引いたことで牛吉を）責めようとしたが、大した獲物があるのでもそれほど叱らず、その鴈を料理し、近所の者を集め、思ふ存分（食べて）残るものがなくなつたところで、空鍋を牛吉に渡させてその翌日から、例の（鴈を）射当てた田のあぜ道へ、雌の鴈がやつて来て悲しそうに鳴く。牛吉はその声を聞いて、ひどく悲しんだ。また毎晩（その雌の鴈が）牛吉の夢に出てきて、雄の鴈の供養をしてあの世での苦しみをなくしてほしいと悲しむ。牛吉はこのことを人にも話さず、病氣だと言つて久右衛門のところを辞め、そのまま髪を切つて出家して、的心と名乗る。浜辺に仮小屋を作つて住まつたが、二十三年の月日を過ごして、初秋の頃から村の人に話して言うには、「私はこの九月に死ぬだろう」と。その言葉通り、九月二十三日、病氣をしていたわけでもなく、昔鴈に逸れ矢が当たつたその日に死んだのは不思議な巡り合わせであつたことだ。

持仏に辞世の句が記してあつた。

先立ちし……（思えば、自分の放つた矢に当たつて）先だつた

鴈は（自分を）浄土に導いてくれる道しるべだつたのだなあ